

KONAN UNIVERSITY

若者の非社会化と家族（2006年度 公開シンポジウム報告 育てることの困難 - 家族・教育・仕事の今を考える）

著者	斎藤 環
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	8
ページ	33-41
発行年	2007-02-14
URL	http://doi.org/10.14990/00002599

若者の非社会化と家族

斎藤 環

精神科医、評論家。専門は思春期・青年期の精神病理学、病跡学。「社会的ひきこもり」を始め、さまざまな青年期の問題に関する論考を展開している。また、病理化したひきこもりの治療や支援活動、啓蒙活動にも力を注いでいる。サブカルチャーへの造詣が深いことでも知られる。

若者における非社会性の問題

若者という視点から、今日のテーマ「育てることの困難」についてお話しさせていただきます。まずはある映像を見ていただきたいと思います。

ビデオ上映

〈どんな感じなの。説明しにくいこと?〉

若者1 どういう感じと言ったらいいか…

〈苦しいだろう?〉

若者1 はい。授業がまともに受けられないという感じでしたけど。

〈胸が苦しくなる感じ?〉

若者1 はい。先生の声もあんまり聞けなくなるという、そういう感じですね。

〈学校にいないときはそういうのは起こらないの?〉

若者1 はい。時々はあることはあるけど、そう激しいということはないです。

〈学校に行くのと、わりとてきめんに出てくる?〉

若者1 はい。緊張、ストレスでカッと…。

若者2 あの…過敏性大腸。

〈どういうこと、それは?〉

若者2 なんかがこう、学校に行く前になると、トイレに出てこれなくなる。それで困って、結局ここにいます。

〈トイレから出てこれないということは、何してるの?〉

若者2 なんとというか、おなかの調子が悪くなって、今から学校に行くぞとなるでしょう。かばん持って出ようとしたら、またトイレに行きたくなって、すぐ戻る。それはつまり繰り返ししてる。

若者3 僕はね、過呼吸。

〈過呼吸って…?という症状なの?〉

若者3 息を最初に大きく吸い込むでしょう。最初は深呼吸吸みたいんだけど、息がだんだん速くなってきて、それで息が詰まっちゃうんですよね。それで、まぶしいものとかね、すごく嫌になる。

いきなり映像を見ていただいたわけですが、一見すればあまり最近の映像ではないことはおわかりいただけると思います。どのくらい前のものだと思いますか。これは約三〇年前

のNHKの特集番組の映像です。

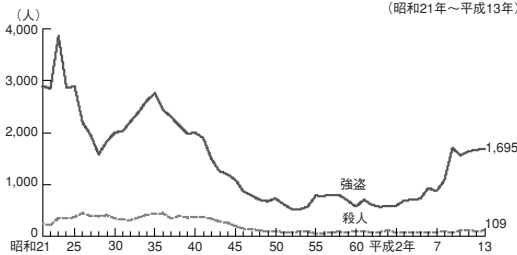
三〇年前だと知ると感慨深いものがありますけれども、皆さん、どういう印象を持たれましたか。私はこの映像を見て、「三〇年間何も変わっていないじゃないか」という思いを新たにします。最近の若者がしゃべっている姿と言われても、そんなに違和感はないのではないかと思うんです。「さすがに昔の若者は違うな」と思った人もいるかもしれませんが、この番組を見ていても、違いがはっきりわかるのはせいぜいファッションくらいです。彼らが楽しんでいるサブカルチャーにネットがないなど風俗的な部分での違いはありますが、メンタリテイにおいては、今われわれが問題視しているようなものは、ほぼこの時点で出揃っているのではないのでしょうか。ここに映っている方は、このときだいたい一六歳、一七歳だとすると、もう四〇代後半という大人になっています。本当に「何が変わったんだろうか」という感じがいたします。

今日お話しすることは、非社会傾向についてです。非社会といえますのは、反社会ということに對比しての言葉です。ここに示したのは犯罪白書の凶悪犯の少年検挙人員の推移のグラフです(図1)。メディアの報道だけ見えますと、突出した事件だけを取り上げて、「最近若者は凶悪化している」とか、「キレやすくなっている」とか、「どんどん危険になっている」とか、「心の闇がどうした」とか、そういう論調が主に出てきていますが、実際に件数を見ると決して増えてはいません。まあ激減していませんが、ある意味、底を打った感じがあります。いちばん青少年が凶悪だったのは昭和三五

で、殺人や強盗の数がピークを迎えています。それがだんだん減ってきました。昭和五五年頃以降は、同じぐらいの水準で推移しています。強盗は増えているじゃないかとおっしゃるかもしれませんが、強盗というのは定義が変わると増えるんです。本格的な強盗だけではなくて、たとえば万引きしたときに店員をちよっと突き飛ばしたものを強盗とカウントすれば、増えて当たり前なんです。

殺人に関しては、人が死んでいるわけですから定義が変わりようがないこともあって、だいたいピーク時の四分の一の水準で推移しているのが現状です。見方や言い方にもよりますが、昔に比べて若者が凶悪になったとは言えない。むしろ問われるべきは「なぜ今の若者はおとなしいのか」ということです。国際的に見ると、だいたいどの国でも二〇代はいちばん荒れる時期です。殺人の比率や凶悪犯罪の比率は二〇代が高い。ところが日本だけ違う。日本の人口比で言えば、もっとも凶暴なのは三〇代。次が五〇代で、その次が二〇代です。これ

凶悪犯の少年検挙人員の推移



注 警視庁の統計による

図1

も非常に不思議な現象です。なぜ日本の若者はこんなにおとなしいのか。犯罪や人に迷惑をかけることを「反社会」とすれば、社会に背を向ける「非社会」傾向のほうが日本の若者については顕著ではないかと言えます。

ニートの数は、一九八〇年から二〇〇〇年までに約一〇倍になったこととなります。ニートの増加傾向については異論もあり、九〇年代を通じて全く増えていないという指摘もあります。これについてはいろいろな説があるという程度の理解でよろしいかと思えます。大雑把に言えば「若年無業者」と呼ばれる、働こうとしない若者が数十万人いることが、最近特に問題視されています。ひきこもりの数と重なるところがありますので、押さえておいていただければと思います。

次は未婚率の推移です。だんだん未婚の割合が増えていきます。女性で言えば、二〇代後半の未婚の率は二〇〇〇年で五四・〇％で、過半数になっていきます。男性については、三〇代前半で未婚の割合が四二・九％で、非常に上昇している。これは少子化の問題とも絡むでしょうし、結婚することが、社会参加の第一歩とはいきませんが、第何歩目かだとすると、未婚率の上昇は非社会行動の一つの現れと言えるかもしれません。

お断りしておきますが、「非社会性がいけない」という話ではないんです。非社会的であるというのとは一つの形容であり、そこに価値判断はとりあえず含まれていません。反社会性はあります、非社会性は誰かがすぐ迷惑をこうむる問題ではありません。少子化が進んだら若年者の負担が増えるのでは

ないかとか、子どもが減って経済も停滞するのではないとか、いろいろ結びつけをする場合には価値判断の要素も入ってきますが。

考えてみるとわれわれ専門家もそうですし、社会全体も、特に先ほどの映像の七〇年代後半頃から、若者イメージに関しては専ら非社会傾向に注目してきたと言えるのではないのでしょうか。「不登校」の問題は一九五〇年代からありますが、七〇年代から急増して、ピーク時の二〇〇一年には一三万九〇〇〇人という数になりました。その後少し減少傾向に転じていますが、ある種の非社会性として取り上げられてきました。全共闘世代以降の若者が無気力化している状態を指す「三無主義」や「スチューデント・アパシー（学生無気力症）」という言葉があります。こういった言葉を学校精神保健関係者が多用したのも、七〇年代後半です。学生運動に燃えて、それこそ反社会的行動に走った大勢の若者がいた時代が終わったら、みんな白けてしまった。勉強もしないでバイトやサークルばかりしている学生を見て「嘆かわしい」と言う風潮が生まれてきたわけです。

八〇年代に入ると「おたく」という新しいライフスタイルが出てきます。アニメやゲーム、漫画という子ども時代に卒業すべきガジェットを大人になってからも手放せない若者が増えてきます。これも対人関係、特に女性が苦手な人たちが、フィクションの中で性的なものも含めた代替物を楽しむというライフスタイルです。これは、「性犯罪者予備軍」みたいな誤ったイメージと共に流布されて人々の嫌悪の対象になりま

した。昨今は、見直されているというほどでもありませんが、多少評価が変わってきた感じはあります。

「フリーター」は、もともと八七年にリクルートの社員が命名した流行語でした。現在四〇〇万人と言われています。最近少し減少に転じたという話もありますが、何百万という規模で推移していますし、高年齢化も進んでいます。もはや三〇代、四〇代のフリーターも珍しくない状況になっています。正規の職に就かないという意味では、これも非社会的なもの、の現れと呼んでいいかと思えます。

「パラサイト・シングル」は、親と同居して生活のインフラ部分を親に依存しているとされる独身の若者です。家から出ない、家庭を持つとしないという意味では社会性に乏しいと言えます。これも増加傾向で、とどまることを知りません。社会学者の山田昌弘さんがこの言葉を作った九七年当時は一〇〇〇万人でしたが、最近の統計では一二〇〇万人と修正されています。ニートが六四万人で、私が臨床家として扱っているひきこもりは四一萬世帯というのが、一応いちばん信頼のおける数値になっています。これはアンケートのとおり方に少し問題があるので、かなり過小評価になっているという印象を持っています。

若者における「成熟」の困難

これらの背景には成熟の問題、育てることの問題がどうしても絡んできます。しかし、一概に育てる能力が劣化しているとか、家庭の機能が低下したとかと批判的に言っても仕方

がない面もあります。日本に限らず、成熟の遅れは先進国共通の問題として考えることもできると思えます。共通しているのは、近代化による通過儀礼的なものの喪失ですね。成人式はもはや自治体がやってくれる同窓会以上のものではありませんから、二〇歳というのは何の基準にもならない。

さっきの映像が出た八〇年前後に、既に笠原嘉先生が「今の若者は三〇歳ぐらいが成人である」とおっしゃっています。最近はその状況がさらに進んでいて、成人年齢は三五歳ぐらいじゃないか、あるいは四〇歳ぐらいじゃないかという風評があります。さらには成熟が不可能になってしまったのではないかという見方もあります。成熟というもののイメージが崩れているというか、成立しにくくなり、自立のイメージも混乱してきています。

社会が成熟して経済的に豊かになった結果として、いわゆる青年期ができた。青年期は蒸気機関と共に発明されたという言葉もあるようですが、要するに近代化と共に若者に猶予期間が与えられました。前近代社会には、子どもに猶予期間はありません。子どもは少し働けるようになったらすぐ労働力に組み込まれてしまいますから、そこに思春期、青年期と言われるモラトリアム期間は成立しようがないんです。経済的に豊かになって、子どもの数がある程度少なくなつてくるのとモラトリアムが成立する。これが長くなるにつれて、個人の成熟度は低下する。ですから、私は社会の成熟度と個人の成熟度は反比例するという法則が成り立つだろうと考えています。

それと共に、さまざまな自明の価値観への懐疑が起ります。就労、結婚、殺人の禁忌といったものに対する疑いの視点が生まれてくるわけです。成熟というものが社会的な価値観を内在化していく過程であるとすれば、いわゆる「自分探し」の旅に出てしまうような若者が増えることは、避けられない傾向だと思えます。自明性が損なわれることによって、彼らはまとまった価値観を持つことができず、いつまでも落ち着きません。

若者であることの困難ということで、ここには一種の子育て論と言ってもいいようなものがあります。発達心理学という学問がありますが、広い意味ではフロイトもそこに含まれます。そしてフロイトから発展した学派のなかには、E・H・エリクソンのようにアイデンティティの獲得など段階的な成熟を提唱する派もあれば、そういうものを重視しないラカン派のような学派もあります。

フロイトからラカンの立場で一番重要なのは、去勢の過程です。去勢とはペニスを取ってしまうことです。通常は生殖機能を奪うことですが、精神分析では別の特異な意味を持っています。非常に簡単に言ってしまうえば、去勢とは万能感を抑制することです。子どもは、母子関係の密着した状態のなかでは、母親の力を借りることで「自分は万能である。自分は何でもできる」といった幻想に浸りやすい。ここに父親が介入してくる。父親は切実な力を持って介入してきます。密着した「ママと僕」の蜜月関係にくさびを打ち込んできて邪魔をするわけです。このくさびを打ち込まれることによつ

て万能感の幻想が崩れて、その結果として言語や社会性というような機能が獲得されていく。これがいわゆるエディプス・コンプレックスの機能です。私はこれを、「育てる」ことを考えていくうえで非常に大事な部分ではないかと考えます。

先ほど、高石先生が人魚の物語で男性的機能と女性的機能を分けられました。男性的機能は、切実な機能と言ってもいいですし、拒絶的と言っても否定的と言ってもいいものです。必ずしも現実の父親がその機能を代表する必要はなく、母親が父親的に振る舞う局面があってもいい。つまりエディプスを「父と母と僕」とベタに受けとめる必要はありません。これを拡大解釈しますと、父的な機能、父性的な切実な機能に対する母性的機能というものがありません。切実に対しての連続、あるいは否定に対する承認の機能です。この二つの機能のせめぎ合いの中で「個」が確立されていくというのが、エディプス的な関係性の基本にあると考えていいと思います。

そう考えると、これは幼児期の一時期に限った話ではありません。実は育児という局面のあらゆる場面に、エディプスの機能が動く契機は含まれています。そこには常に切実と連続のせめぎ合いがあり、そのどちらも欠くことのできないものです。具体的には、切実な機能ばかり重視しますと虐待になってしまいます。否定の連続では子どもは自己肯定感を持ってませんから。深刻なトラウマを負ってしまうことによつて、発達してから広い意味でのPTSD的な問題や解離の問題を生じてくることが起ります。一方、連続性ばかりが強調されると、過保護な母子密着の関係が前景化してきます。

これはこれで別の問題が起こってきやすい。具体的には、ひきこもりをはじめとする非社会傾向に向かう可能性がある。今日は非社会傾向についてのお話ですから、母子密着の問題について言わざるを得ないのかもしれませんが、どちらの機能も、時代によって低調になるようなものではないと私は思います。また、エディプスの問題は個人と家庭、家族と社会、あるいは社会と個人など、いろいろな関係のなかで成立するものであって、必ずしも家庭のなかに封じ込められるものではないと思います。

臨床面から見た場合の成熟の二つの条件を考えます。価値判断抜きで、臨床家の立場から成熟の問題を考えた場合に私が重視するのは、一つはコミュニケーションの能力です。もう少し補足すると、「情緒的なコミュニケーション能力」です。単なる情報伝達であればませた子どもでも十分できますから、別に成熟は関係ないという言い方もあるかもしれませんが、しかし情緒的なコミュニケーションは一定の成熟とスキルがなければ難しい。具体的には、相手の感情を読み取ったり、自分の感情を適切に表現し、相手に理解してもらったりする能力です。これは成熟と共に獲得される一つの機能です。それから、「欲求不満耐性」と呼ばれるものがあります。これは自分の欲求や欲望がかなえられないときに、キレずに我慢する能力です。大局的に見て、私は今の若者の抱えている問題はこのどちらかへの偏りが引きおこすものではないかと思っています。

ひきこもりは、コミュニケーション能力の問題として起こ

ってきやすい。この能力が十分に獲得できないか、あるいは能力があってもそれに対する苦手意識が強すぎれば、ひきこもりのなかり方のほうにどんどん傾斜していく傾向があります。一方、ひきこもりの人は——すべてのというわけではありませんが——よい面も持っています。彼らは非常に我慢強いんです。我慢強くなければ、一〇年間も何もしないで部屋にすることはできないと私は思います。お母さんに対してキレるのは別です。それはキレていい相手だからキレているわけで、社会に対して犯罪を行なうようなことはめつたにありません。それどころか彼らは、親が対応を間違えてタヌキをいぶり出すみたいに居心地が悪くなったら出てくるだろうという発想で兵糧攻めにしても、非常に耐えるんですね。そうしてお金をあげなかつたりすると、だんだん欲がなくなっていく。最終的には仙人みたいになってしまふ。親から見れば究極の手が掛からない息子のできあがりです。これはいちばん怖いことです。

もう一つは欲求不満耐性に問題がある場合です。いわゆるキレる若者、犯罪や非行に走りやすい若者です。ただこちらの若者にもいいところがあって、キレやすい若者は一般的にコミュニケーション能力が高い人が多い。むしろあまりにも高すぎるので、自分の欲望をコミュニケーションのなかで満たす習慣がなくなってしまっている。たまたま不具合で満たされないと、キレるといふコミュニケーションの形をとりやすいと言ってもいいのかもしれませんが。このようにコミュニケーションと欲求不満耐性という二つの軸を中心にして、今の問

題が起こつてきているわけです。発育の問題はどちらかに傾いてしまう可能性があるのかもしれませんが。

社会における中間的な機能の衰退

次は、価値基準における自明性の退潮の問題です。価値の伝達はますます難しくなっています。先ほどの汐見先生のビデオでも中間の問題が言及されました。その意味とはちよつと異なるかもしれませんが、いま社会と個人をつなぐ中間層がかなり弱つていることは確かだと思います。それは、地域共同体、社会全体の機能、あるいは人間関係と言つてもいいものです。価値判断は基本的にそこに集約されると私は思っています。自明の価値判断が弱体化しているということは、要するに今まで価値の伝達を担ってきた中間的な機能が機能不全を起こしているということなのかもしれません。

これには、一つは家族機能の変化——必ずしも低下とは言いませんが——が関係しています。戦前の大家族的なものが退潮し、核家族化・母子密着・父親疎外という三セットが前景化してきます。これは決して日本だけの事情ではありません。最近韓国のひきこもり研究者と交流する機会がありました。韓国でも同じような現象が起こっています。核家族化が進み、母子密着が進み、父親が家にいらなくなるといふ傾向があります。これは奇妙な一致と言つてもいいかもしれませんが。なぜならば、日本人と韓国人は必ずしも国民性においてよく似ているとは言えないからです。それにもかかわらず、そういった現象が起こつてきているとすれば、ここには

別の共通する要因があるのかもしれませんが。

一つ共通すると言えるのは、まず、社会のインフラにおける近代化が進んでいることです。もう一つは、韓国も日本も儒教文化圏だということです。この二つが何らかの要因を担っている可能性が高いと思います。たとえば日本には父親疎外のある方として単身赴任がありますが、韓国ではあまり一般的ではありません。韓国で多いのは、子どもとお母さんの英語圏への留学です。あちらは英語ができると社会的な地位が保証されるんですね。お父さんは国で一生懸命お金を稼いで、仕送りを続ける。そういうお父さんは「雁パバ」(渡り鳥の父)と言うんですね。大変鬱病などになりやすく、自助グループまでつくられているとのこと。父親疎外は日本だけの問題ではありません。

それから、先ほども言つた地域社会の衰退化と家庭の密室化があります。密室化というのは、他人が家に入りにくくなつたということでもあります。昔はよく来客を家に泊める習慣がありました。最近の家庭でそういう交流はあまりありません。パーティはよくやるかもしれませんが、DVや子どもの暴力の問題が深刻化しやすい背景には、こういった密室化による風通しの悪さの問題があると思います。こういったものが非社会化した若者の温床——という言い方をするとちよつとよくないもののようなのですが——、居場所として、機能しやすい状況になつていると言えるでしょう。

その一方で、日本では不適應に陥つた若者がヤングホームレスになりにくい。欧米でヤングホームレスは深刻な問題で

すが、日本にはほとんどいません。これは、ドロップアウトした若者を家庭が優しく抱きかかえているからです。ある意味、家族が社会防衛機能を担わされているという見方ができると思っています。そのおかげで政府は随分、治安維持のコスト面で得をしているはずで。そういった見方もできるので、ひきこもりやニートは一概にけしからんとばかりも言えないところがあるとは申し上げておきます。

「困難さ」へ向けた提言

いろいろ申しましたが、私は子育ての専門家でも発達心理の専門家でもありません。私の立場から言えるのは、さしあたり子育てに失敗したようにみえる家族の例から何が見えてくるかということだけです。それについて少し補足的に申し上げておきたいと思えます。

大人としてのモデルを示していくという家族の価値は、いまだに高いだろうと思えます。中間手段が失われてしまった以上、学校の教育ではなく、家族がその機能を担うほかないのではないのでしょうか。『家族の痕跡』（筑摩書房、二〇〇六年）という最近の本でも書きましたが、論理に還元できない不透明な価値を与えることができるのは、私は家族しかないと思えます。たとえば、「なぜ人を殺してはいけないのか」とか、「なぜ人に迷惑をかけてはいけないのか」といった価値判断には、論理的に厳密に分解していくと実は根拠なんかないんです。これは哲学では有名な話です。こういう根拠のないものを一つの判断力として植えつける機能を持てるのは、繰

り返しますが、家族だけです。だから家族がそういったものに対する倫理観を体現できるかどうかということが非常に大事です。それは、子どもに対して倫理的に接するとか、厳しくやりますよとかという話だけではない。本人自身がそのように振る舞っているかどうかが非常に大事です。

次に、「転移」という精神分析用語を取りあげてみます。これは一般的には過去の対人関係を今の人間関係において反復することです。わかりやすい例で言うと、年上の男性ばかり好きになってしまう女性がいるとします。それは実は「父親転移」を繰り返している、いわゆるファザコン的なものを持つているために父親への感情を反復していると解釈されることになる。本当かどうかは知りませんが、そういう言い方をするのが精神分析です。

しかし転移にはもう一つの見方があります。それは欲望の転移です。何かに対する欲望が、ある種の人間関係の中で一人の人から相手の人に移ることを転移と呼びます。この場合は、移るのは器であつて中身ではありません。器が移っている。だからいま申し上げたような道徳観や倫理観を移そうと思つたら、ただ単に道徳や倫理を教条的に押しつけるだけでは全然足りなくて、親自身がそういったものに対する「欲望」を持つて示すことが必要です。これは勉強に対しても、何に対してでも一緒です。何かに対する欲望そのものを転移させていくことが子育てであり、教育であると私は考えています。

最後に、最近考えているスキルアップという発想について

お話しします。一つの例を挙げます。私の知り合いでプロの音楽家がいるのですが、この方がたまたまひきこもり、あるいは発達障害を抱えた若者のレッスンを引き受けたんです。全く治療という意図を持たずに関わっているんですが、レッスンを二年、三年続けていったら、なんと勝手に改善が起ってしまった。具体的にはひきこもっていた人が大学に復帰して、ちゃんと就職するところまでいきました。

音楽がよかったかどうかは検証されていませんが、どうもいらしいという話を聞きまして、結構これは盲点だったかなと感じているわけです。治療という発想は、基本的に欠けたものを補うとか、過剰なものを抑制するとか、要するに目指すべき平均があるんです。標準がある。標準から足りない部分を補いましょうというのが基本的な治療の発想です。今は子育ての中に医療化という波が押し寄せていますので、標準を目指そうという発想は結構根深いと思います。

この音楽家の発想は、その逆を行ったわけですね。欠けているかどうかはどうでもいい。とりあえず一つの機能を平均以上に高めましょう、そうしたらほかの機能も後からついていきますよという発想です。私はこれは結構使えると思います。治療においても使えると思いましたが、育児という面でも「バランスよく育てる」ことがすべてではないと考えていくためのヒントになるのではないのでしょうか。皆さんはどう感じられるでしょうか。これに関してはまだ発展途上ですので、一応の提言として申し上げるだけにとどめておきます。私の話はこれまでといたします。